

学園関係者聞き取り調査

大東文化学院草創期と池田英雄氏の学問

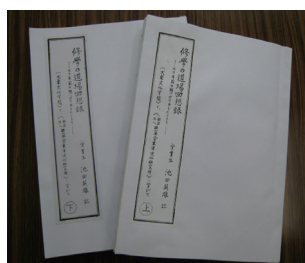
—大東文化学院で培った学力を『史記』研究に傾注—

池田英雄氏は1908（明治41）年7月14日生まれで、今年“白寿”を迎えられた。数えて百歳である。昨（2006）年、大東文化歴史資料館へ『修学の道場回想録——七十年前の思い出の糸をたぐりて——〈大東文化学院〉と〈豊無窮会東洋文化研究所〉に学びて』と題する上・下2冊の自筆稿本の複写本を寄贈された。タイトルにあるように、氏は大東文化学院で本科（3年制）・高等科（3年制）の6ヶ年の課程を修めている。本科入学は1926（大正15）年4月、卒業は1929（昭和4）年3月、高等科入学は同年4月、卒業は1932（昭和7）年3月で、高等科の第4期生である。『回想録』から当時の学生たちの勉学にいそしむ姿を垣間見ることができる。

池田氏の入学当初は、私学・官学両派の教授陣の対立による学院紛争の真最中であった。初代総長の平沼騏一郎が枢密院副議長の要職に就くに当たって辞職され、後任の井上哲次郎東大教授が二代目総長に就任し、その後すぐに紛争が起こり、氏の入学した年に私学派の教授陣が一斉に退職した。その中に氏の御尊父池田四郎次郎も含まれていた。池田四郎次郎は近代日本の『史記』研究においては、瀧川亀太郎と並ぶパイオニア的存在であり、氏は御尊父の研究を継いで、親子二代で『史記』研究を完成させたのである。

本来、氏は文字学に興味を持たれ、高等科卒業後すぐに吉田増蔵教授が創設した書原撰述所（外務省の対支文化事業からの研究資金の供与により設立）の助手に採用され、文字学（説文解字）の研究に従事された。ところが翌年（1933〔昭和8〕年）1月に御尊父を交通事故で亡くされ、3月から母校の日本中学校（財団法人）で教鞭を執ることになった。実業界にいた長兄から「資金は自分が持つから、父の『史記』を完成させよ」との命を受け、教鞭を執りながら『史記』研究にも専念し、徴兵には丙種合格（体重不足・第3乙）のために戦地に行かずに済み、念願の研究を完成させることができた。

氏は若い頃から痩せていて、“お線香”というあだ名をつけられていたとのこと。お宅を訪ねた際、書斎に“千古”と書かれた扁額が掲げられていたので、意味をお尋ねしたら、“線香”即“千古”で、母校の校長猪狩又蔵が揮毫してくれたとのこと。瘦身（スマート）が健康の秘訣と思われるが、とにかく“『史記』研究を完成するまで斃れるわけにはいかない”ので、摂生に努めて規則正しい生活を送ってきたとのこと。



44歳から62歳まで教鞭を執られた都立豊多摩高校では、研究日を1日もらい、研究日と日曜日は全日『史記』研究に当て、平日も夕食後の7時から8時までを教材の準備に、8時から11時までを『史記』研究に当てたとのこと。

御尊父池田四郎次郎が大東文化学院で教鞭を執られ、さらにご子息英雄氏が学院で学び、その漢学の素養に磨きをかけて研究を成就されたことは、大東関係者にとっても誇らしく、また感謝しなければならないことであろう。氏の益々の長寿を願って已まない。

（中国学科准教授・歴史資料館運営委員会委員 吉田 篤志）



池田英雄氏・ご自宅にて奥様と

大東アーカイブスの動き

臨床検査科閉科にともなう資料受け入れが行われました

昨年度、2007（平成19）年3月をもって大東医学技術専門学校臨床検査科が閉科されました。閉科にあたり、歴史資料館では、臨床検査科で使用されていた各種顕微鏡や化学天秤等の器具・備品、教科書といった教材の一部を学園関係歴史資料として受け入れることとなりました。

また、第4回企画展（2007年10月1日～開催中）のテーマを「大東医学技術専門学校のあゆみ ～臨床検査科の45年～」とすることが昨年度末に決定されたことにより、企画展開催に向けて急遽受け入れ品の整理が行われ、現在までに受け入れ整理された資料は130点余りとなっています。

臨床検査科の歴史を振り返る今回の企画展は、大東文化歴史資料館展示室（板橋校舎2号館1階）において2008年3月まで開催しています。受け入れた資料公開を主たる目的として、臨床検査科閉科時に使用していた旧型の顕微鏡や化学天秤、教科書をはじめ、教育課程や実習風景、最後の卒業生たちが書いた寄せ書きまで、大小あわせて100点あまりの資料を展示しました。

